

「早春の高尾山紀行 (7)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

フィールドで自然観察をする場合、図鑑や自然観察のガイドブックを携帯するのは良いことだ。対象物に出会った時に、まず何をしたいかといえば、それはその「名称を知りたい」ということだろう。植物でも昆虫でも菌類でも鉱物でも同じだ。これは子どもの自然観察でも見られることで、「先生、このお花、何ていうんですか?」とよく聞かれる。「対象物の名称を知る」ということは、その対象物に対して探究心を持つ第一歩と言える。

フィールドでの自然観察で一番理想的なのは、「詳しい人と歩く」ということだ。私の場合、鳥類と菌類のことは少しはわかるが、顕花植物や昆虫にはあまり詳しくない。しかし、今回同行していただいた露木先生は植物にも昆虫にも非常に詳しく、「子ども電話相談室」のように“パカスカパカスカ答えが答えが”返ってくる。



たとえば、この葉の上の迷路のような模様、公園などでもよく見かけるが、私には何だかわからなかった。小さなカタツムリかナメクジでも這ったあとだと思っていた。しかし露木先生によれば「ハモグリムシ」の食痕だという。正確には「ハモグリバエ」や「ハモグリガ」の幼虫の食痕らしい。葉の表面ではなく、あえて葉の内部にもぐって、内部の組織を安全に食べているわけだ。この日は、その幼虫「本人」には出会えなかったが、いつか子どもたちと探してみたい。

しかし、その場では名称がわからずに終わってしまう場合もある。むしろそういうケースのほうが圧倒的に多い。生物は属、種、亜種や変種まで含めるとあまりにも多様で、専門家でも同定(種名の決定)が難しいことが多いのだ。



たとえば、この空色の花。遠目にはスミレの仲間かオオイヌノフグリのようにも見える。しかし花や葉の形は、いずれも当てはまらない。これは私も露木先生もその場での同定はできなかった。



帰宅後に調べた結果、「ヤマルリソウ」という植物とわかった。ヤマルリソウ(山瑠璃草)は、ムラサキ科の多年草で、沢や川の近くのやや湿った場所を好む。高尾山の3号路は、何度か小さな沢を横切るので、そのような「小さな自然環境」が見られる。写真のヤマルリソウも沢の近くのわずかな平地に咲いていた。

花卉は5枚で、咲いたばかりの時は薄青色だが、だんだん紫色が強くなり、名の通りの姿になるらしい。次回はその色の花を見てみたいと思った。